



保育叢談中より

和歌山幼稚園 中 村 楠 雄

幼な兒を相手の生活は私にとつて本當に喜びであり感謝であります。

そして私の心に觸れる様々は時々文字となつてノートを埋めて行きます。それがこの保育叢談なのです。

勿論人様のお目にかけてられる様な事が一つも書かれてゐません。でもこれが皆様の御つとめの間のお笑草にでもなりますれば、全然徒事でもございませんでせう。以下二つ三つお目にふれる事に致します。

一、

謙三ちゃんのおうちは随分遠いのです。それでもどんな雨の日でも風の日でもチツトモ休みません。いつも透明なセルロイドのバス入れを腰にぶら下げてお兄ちゃんと二人仲よく電車に乗つて幼稚園へ参ります。

謙三ちゃんが無邪氣で幼い心それはもう何と言つたらよいのでせう、そこには全く善も悪もありません。本當に純一な透明なものです。

私は謙三ちゃんのそれに接する時に何時も神の

御姿を見る様に感じます。

此間幼稚園へバレーボールを五個買ひ入れました。これは割合軽いから危氣も少ない上に丈夫ですから幼稚園などで使ふ遊具として大變よろしいと思ひます。殊にこのまり遊びは秋の末から冬へかけて寒い頃にお遊びするのに數が少なくても大勢遊ぶことが出來て其の上割合運動量の多い遊びが出來ますから季節にもふさはしく運動具の經濟ともなつていゝお遊び具だとも考へて居ります。

このボールを買つてから先生にも子供にも一段と元氣が加はつた様です。毎日々々このボールで賑やかな遊びが繰り返へされてゐます。

謙三ちやんのお兄ちやん達は元氣に投げたり受けたりしてお遊びが出來ます。でも謙三ちやんはどうかすると見てゐます。しかし謙三ちやんも本當は毬を拾ひ度いに違ひがありません。

時々チヨコくと走つて行つて見るので分ります

けれどもお兄ちやん達はすばやいから大てい拾はれてしまふのでツイたつて見てゐる事になるのでせう。

或日私も毬投げのお仲間入りをしてゐた時ふと見ると謙三ちやんもそばへ來てゐます。

「謙三ちやん、この毬謙三ちやんに投げてあげませう」と言ひますと嬉しさうな顔をして小さなお手々をひろげました。極短かい距離からポイントと投げるとそれを受け取つた謙三ちやんの満足さうな顔。そして早く受けた喜びと投げる嬉しさをむつちやにして眼と鼻と口を一所によせて、ドチラに投げやうかと考へるひまもなくイイツと喉をかする様な喜び聲をあげると共に盲めつぼうに投げました。

自分の頭の上へ二尺と上らぬ様な投げ方をしても一里も高くほり上げた様な満足を味はつてゐます。

この謙三ちやん達の美しくさ、純真、幼なさに接する時私達は本當に清められます。私達はこの美しくさをそこなふ事はないでせうか。考へて見ると恐ろしい事です。此間謙三ちやんのお母さんからお話を承はる機會がありました。

「先生發音の方を御注意頂きますので本當に結構でございます。うちの謙三がね、ほんとにいけませんでしたの。それにこの間も幼稚園から頂戴してゐます表であなた家内中言つて見たのでございますよ。すると謙三までがチャンと正しく出來ますのほんとに家内中喜こんだのでございます。」と其時おつしやつて居られました。どちらかと申せばむつりなさつた温なしいお母さんのお言葉ですから確かにいくらか謙三やちんの舌廻りに進歩のあることをお認めになつたのに相違ありません。それにしても海の汀に砂山を築く様な効果の上りにくひ仕事だと考へてゐますのに、たとひ

いくらかでもしるしのあらはれてゐる事殊に幼い謙三ちやん達の上にも少しでも進みの跡のしるされてゐる事を知るのはまた限りない喜びであります。それから又言はれます。

「この間兄の方が大變ないたずらをしたので御座います。それであたし思ひきり強くしかつたのです。そしてしばらく外へ出してやらうと思つたのですが其時そばにあつた弟がポロリと涙を流したと思ふと『お母ちやん、もうお兄ちやんをこらへてあげて頂戴』と申しますの。こんな幼いものでも眞實兄を思ふ情があればこそと思ふとあたしまでつい泣かされて……もうそれ以上どうすることも出来ませんでした。

それにつけても思ひますのは謙三も随分やんちやんな子でしたのにこれだけやさしい心を持つ様になつたのも全く幼稚園で感情の教育に御注意下さるからだと本當に有り難く思つて居るのでござ

います。」と。

こんなにおつしやつて頂いては誠に恥かしく思ひました。子供の感情教育の大切であることは考へて居ります。そして及ばずながらも色々の方面に心を砕いては居ります。でもこう真向から感謝の言葉を聞いてはまだく私達の努力の小さい事と思ひ合せてかへつて赤面する位でありました。

何にせよ見逃す事の出来ぬのは謙三ちゃんを持つ尊い愛の芽です。謙三ちゃんのお母ちゃんは其のいとし子から本當に美くしいものを見出して下さいました。私達はまた謙三ちゃんのお母ちゃんを通じて謙三ちゃんのとつとい姿の一面を知る事が出来ました。

二、

赤組の先生がお子さんが御病氣だとの事で中途でお歸りになりました。それで私が代つて其の組

へ行つたのでした。

ふと見ると子供のオーバやマントがすらりと掛け並べてあります。其の時また胸に浮んだのはこの子達はまだ自分でオーバやマントを着たり脱いだり出来ぬと云ふことでした。其の爲めに受持ちの先生も常に相當時間を費やされてゐるのであります。

さうだ、これから生活練習としてこのボタンの掛けはづしをしてお遊びをしようと考へました。

「サアこれから面白い事をしてお遊びませう。

吉之助さんも美津子さんも一二さんも皆んな帽子をかむつてね、それからオーバやマントをかへて先生についていらいしやい」

「先生どこへ行くの」

「面白いなあ」

「嬉しいわ」

「先生もう持ちましたッ」

「サアそれじゃそろ／＼出かけませう」

と云ふ様な一騒ぎがあつて遊戯場へつきました。

「先生帽子をかむつてもいい」

「このオーバどうするの」

「サアそれで面白いお遊びをするのです」

「アア嬉しいなあ」

「嬉しいツ」

わけもわからぬのに無暗に喜んでゐます。

「それでは皆んなね、この筋の所へズットおならびなさい。そう／＼よく出来ましたのね。進さん

茂さん、福時さん、一郎さん、それだけね、そう

五人です、あの前のお火鉢のこちらの筋の所へ自分のオーバを置いて帽子を其の上へせてこちらへ戻つていらつしやい」

「ヤーツ」

と元氣な聲を出しながら走つて行つて置いて来ました。

「こんどはこうするのです。ヨイ、トンと言ひ

ましたら、今の五人の方が走つて行つてあのオーバを着て帽子をかむつて先生の所までくればよいのです、上手に自分で出来た方はゑらいのです。」

「ア、嬉しい、アア嬉しい」

と子供達は一種の調子をとつて聲を合せて喜び叫んでゐます。

「それではヨイ、トン」

「アレー、しつかりー」

「福時さん、しつかり」

「茂さん、しつかり」

こちらでは誰彼へとしきりと聲援をしてゐます。向ふでは嬉しさうな顔をしながら口唇をかみしめてせつせとボタンをかけてゐます。

其のうちに

「先生！先生！」

と言つてあとへ／＼飛んで來ます。上手に出來て

皆んなにほめられてお席の方へ行く者もあり、まだボタンのはずれたのがあつて戻つて行くのもあり、それでも誰も泣かずにどうやらこうやら五人とも自分でボタンがかけられました。

こうして五人程づく立ち替り入り替り致しましたが、すんだ者はさも得意さうに喜色満面で座つてゐるのはむしろいい位でした。

皆んなの喜びの中にこのお遊びが終つて、それから暖かい大火鉢の周圍にぐるりと座つて面白いお話しが始まつたのであります。

受持ちの先生は午後に出ていらつしやいましたそれで子供をおゆづり致しましたが、子供が歸つてしまつてから、

「先生、子供達がね、みんなオーバヤマントを着せていらんと申しますの、そして自分で着るのだと言つて大變ですよ。中にはつめたいものからですから手指がcaじけて自由にならぬものですから泣

いてますのにそれでも自分でボタンをかけやうとしますの、でもねえ自分で着られると云ふの本當に満足さうでしたわ。」

と云ふ受持ちの先生のお話しです。

三二

私の知人にKと云ふお醫者さんがあります。其のお子達の教養と云ふ事にはそれは／＼熱心な方でありませう。何時お會ひしてお話しを承はつても本當に感心させられる事が数々ありますが、左に記しますのは極最近に聞かせて貰つた二三であります。

このお醫者さんの二番目の男の子が只今中學校に行つてゐますが、一寸流が變つてゐるのです。それは小學校時代からですが一面非常に純な感情を持ちあつさりとして愛すべき性格なのであります。がまた一面ポツとしてゐると言つてよいのか加

減のとれない部面を持つてゐます。他の兄弟たちは皆特別優秀な成績でありますが、このお子だけは其の兄弟たちの中では一番まあ下の出来ばへなのです。

近頃になつて學校からの歸りが非常に遅くなるのださうです。何と言つてきかせても遅くなるのださうです。この子供の近くにやはり同じ中學校へ行つてゐる先生があるのですが、或る日この先生が歸宅されやうとして來ますと途中にあるひと云ふ橋の上でぢつと立つて何かを見てゐるのださうであります。學校から先生のお宅まで随分道程があるのですが、先生が歸へられてからフト用事を思ひ出して學校へ行かれやうとして來ますと以前の橋の所でやつぱり立つてゐるのです。それで「早く歸へるやうに」と注意をして置いて學校へ行つて用事をすまして歸途につきました。が前の橋の所へ來るとまだぢつと

何かを見てゐるのださうです。

それで重ねて

「早く歸へるやうに」

と注意を加へてお歸りになりました。

所が其の日もトツブリくれてからひよつくり歸つて來たのであります。しかし其の時このお醫者さんの心中に考へる所がありましたので既に家中のものにも堅く口止めをして且つ御自分も何一つ注意がましい事も言はず迎へてやつたのださうであります。

それから其夜奥様と大學へ行つてゐられる長男の方と三人でどうしてこの二男の方を救ふかと云ふ事について種々考へられたのであります。所が結局あゝして外の方が面白いと云ふのは、出來るだけ外で時間を過ごして來ると云ふのは、それだけ家庭に缺陷があるのだらう、彼を救ふ爲めに明日から皆んな氣持ちをかへて接しやう、そして本

當に家庭の暖かい事を知らせ何處よりも楽しい場所であらしめやうと云ふ事に着きました。

それならどこに其の缺陷があるのだらうと云ふ事を更らに話し合つたのださうです。そして寢についたのが早や零時を越してゐたのですが只今それを實行中であると云ふお話しでありました。

この話を聲きました時其の子を思ふ切なる情と熱心さに思はず眼がうるむのを感じたのであります。こうした熱と眞面目さを世のすべての親達に望みたいと存じます。尙又私達保育者もうつかり之れを聲き流すわけには參りません。やはり眞面目に心から子供を思ひ自己を磨き反省と精進の生活をつゞけねばならぬと存じます。

お醫者さんの話は更らにつゞけられました。

「それから一番末子の美恵子の事です、あれは此間學校で作つた作文を先生に返して貰つたと言つて持つて歸つたのです。で何時もの事ながらと

つて讀むで見ると『菊』と云ふ題なのですが其の中にこんな事が書いてあるのです。

うちのお父さんは菊を作ることが大變おすきです。今年も奇麗な花が澤山咲いてゐます。或る日私とお姉さんと二人で菊を見てゐました。其の時私はお姉さんに

「お姉さんお花のお稽古の時この菊を切つていたゞくといゝのに」と申しますと、

お姉さんは「お父さんよう切るものですか。」とおつしやいました。

それで私は早速家の大きな者達に申しましたのです。子供と云ふものは美しい純な奇麗なものなのだ。それをそばからかう云ふ様な事を言つては全く其の美しい情、殊に大切な親子の情愛と云ふものを臺なしにしてしまふではないか、こんな場合には『さうね、お願ひしたらキツト下さるでせうけれどもお父さんはあんなに可愛がつてお育て

になつたのだから、そんな事申したらすみません』
とでも言つてやらねばならぬ。」と。

この油断のない心、その忠實に子供の姿を見んとする用意、すべて感服の他ありません。私達も本當に子供の一舉動に絶へず注目すると共に我れ等の子供への影響を常に恐れなければなりません。お醫者さんの話は尙更らに進められました。

「それから私の或る子供が或る幼稚園へ行つてゐる時の事です。時々先生ごとを始めますね。さうして先生ごとをすると云ふと何時も必らず最初の間しばらくコクリ、コクリとやります。それから兩手を上にのばしてホウツツと言つた息づかひと致します。

それを見るのはおかしくてたまらなかつた事があります。何時もすこぶる眞面目にやつてゐるのですから、つまり未だ其のころには事の善惡は分らないのですね、只先生と云ふものはこんなも

のだ、先生になつたらこうせねばならぬと一心に思ひこんでゐるのです。それで私は何時も思ひましたが、それだけ子供の小さい頃にはそばのものが注意せねばならぬとね。」

こんな話を聞きますとヂットして居られない氣が致します。私共も不用意の間にどんな悪い影響を及ぼしてゐるかも知れません。『孟母三遷の教』だとか『習ひ性となる』だとか云ふ事もこれと何だか考へ合はされて私共の責任の重い事もしみじみと味はされます。(大正一五、一、三一)